

「大学と地域、そして……」

この15日・16日に第53回市大祭が山の畑キャンパスで行われる。近頃の大学祭は模擬店と「遊び」が中心のようだが、今回は珍しく固めのテーマの講演会も企画された。それで私にもお呼びがかかり、15日の午後に大学と地域、公共事業などの話をする事になった。

じつは3年前に愛媛大学の大学祭に招かれ、「公共事業見直しはこれでよいか」と題して講演した。キャンパスは模擬店などが大盛況であったが、講演会の方も思っていたより多くの参加者があり、いつもの調子で熱く語った。こんな講演会が市大でもできたらと思っていたが、やっと実現して3年で念願がかなった。どんなテーマで話そうかと考えたものの、どういう人たちが参加するか検討がつかず、とりあえず「大学と地域、そして……」とした。当日の参加者によっては話を変えるつもりだが、今のところ次のようなストーリーを考えている。

大学と地域との関係について。社会調査実習の「商店街調査」ヒアリングによると、大学と地域の結びつきは昔、とりわけ「八高」時代の方がかなり強かったようだ。大学はキャンパスの中に閉じこもっているのではなく、地域との結びつきを強めるために、もっと情報発信に力を入れていく必要がある。大学も大きく揺れ動いており、人文社会学部をはじめとして市大の存在意義、説明責任があらためて問われている。

グローバル時代にあって地域も変貌をとげつつある。都心の「繁栄」と下町の空洞化、郊外化など二極化傾向が進んでいる。足もとから地域の現実をチェックしていかなくてはならない。全国でも「元気な」地域といわれる愛知県は、いま開発ラッシュに沸いている。中部空港や愛知万博など大規模プロジェクトばやりだが、とにかく光だけに目を向けがちだが、開発に伴うひずみ=影にも注目せねばならない。過大需要予測や地元負担膨張の構図といった視点で問題を具体的に指摘していきたい。

愛知県とともに名古屋市も「借金で首が回らない」ような台所事情にあり、住民生活や大学にも影響が及んでいる。なぜ借金漬けの台所になったのか、その原因をはっきりさせて対策を提起していくことが大切だ。「くるま社会」下の交通問題から、名古屋市特有の問題が浮き彫りにできないだろうか。

とにかく市大祭で話ができることを楽しみにして、ストーリーを考えていきたい。

(11月1日記)